

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32705

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01700

研究課題名（和文）大学への寄付意識に関する日本の特質の解明

研究課題名（英文）Philanthropy and Japanese higher education: What motivates Japanese donors to give?

研究代表者

福井 文威（Fukui, Fumitake）

鎌倉女子大学・学術研究所・教授

研究者番号：60792364

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本人の大学に対する寄付意識が、如何なる個人の経験や属性に影響を受けているのかを解明するものである。これを明らかにするにあたり、大学への寄付経験者へのインタビュー調査、日本人の成人男女に対する調査票調査、及び、サーベイ実験を実施した。本研究プロジェクトによって、日本人の大学への寄付動機には6つのテーマがあることを示した。また、在学中の給付型奨学金の受給経験が将来の寄付行動と関連があることを実証し、「奨学金と寄付の循環構造」を提示した。その他、基本属性別の大学への寄付経験や寄付をするための条件等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的独自性は、第1に、大学への寄付動機に関する日本の特質性を明らかにするにあたり、現象学的研究から6つの動機の枠組みを提示したことにある。これは、今後の非西欧圏における高等教育と寄付動機研究に寄与するものであり学術的な意義がある。第2に、先行研究で十分に考慮されてこなかった過去の在学中の経験に着目し、それらが卒業後の寄付意識に影響を及ぼす構造を実証的に検証した点にある。特に、給付型奨学金が高等教育受益者本人の費用負担を軽減する側面のみならず、将来的に寄付を通じた高等教育の社会的支出へと繋がる投資的な側面を持つ構造（給付型奨学金と寄付の循環構造）を提示した点は政策的な含意を有する。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate how individual experiences and attributes influence donative behavior towards universities in Japan. We conducted interviews with individuals who have donated to universities, a questionnaire survey targeting Japanese adult men and women, and survey experiments. Through this research project, we identified six themes related to the motivations for Japanese people to donate to universities. Additionally, we quantitatively demonstrated that the experience of receiving scholarships during university tends to lead to future donation behavior, revealing a cyclical relationship between scholarships and donations. Furthermore, the study examined donation experiences towards universities based on gender, age, education level, and income.

研究分野：高等教育

キーワード：高等教育 科学技術イノベーション フィランソロピー 寄付 日本社会 非営利組織

1. 研究開始当初の背景

近年、政策担当者や大学経営者の間で、日本の大学の教育研究活動を支える個人寄付への注目が高まっている。2017年に閣議決定された『骨太の方針』では、日本社会における寄付文化の醸成の必要性が指摘され、2018年の税制改正では大学に対する寄付税制の緩和化がなされた。また、国立大学を中心に寄付募集部門を設置する大学も増えてきている。こうした近年の高等教育政策や大学経営の参考とされてきたのが、寄付先進国とも言える米国高等教育の事例であった。過去の研究においても、米国の寄付税制に関する知見 (Fukui 2018) や、米国大学の寄付募集事例に関する知見 (Onishi 2007) が蓄積され、それらは制度改革や大学改革においても参考とされた。しかし、米国の研究動向を見ていくと、大学への寄付意識は、税制度や大学の経営手法に左右されるのみならず、個々人の経験や属性に強く影響を受けることが指摘されている。

例えば、米国社会における大学への寄付行動を説明する代表的な理論として社会的交換理論、期待理論がある。社会的交換理論は、人は他者との関係をコストとベネフィットの関係から捉えて行動するという前提に立ち、寄付者は在学時代に受けた大学からの便益によって寄付行動を決定すると想定する (Monks 2003)。一方、期待理論は、寄付をすることを通じて、その組織或いは社会のパフォーマンスが向上するか否かという視点から寄付行動を決定するという前提に立ち、大学の教育研究活動の公共的な価値に対する個々人の認識を重要な変数と捉える (Weerts & Ronca 2007)。

こうした個人の経験や属性に着目した実証研究は、米国において数多く見られるが、これらの理論が米国以外の社会における大学への寄付行動や寄付意識を説明する上で有効なのか検証できていない点で課題があることが指摘される (Drezner & Huels 2014)。特に、日本の高等教育研究は、この領域において立ち遅れており、日本人が大学への寄付に如何なる意識を持ち、それが如何なる経験や属性に規定されているのか検討するためのデータが決定的に不足していると言わざるをえない。そのため、近年の大学改革では、日米の大学に対する寄付意識の違いがブラックボックスとなったまま、米国の税制度や大学経営手法が導入され、日本社会に見合った政策論議が進展しない状況に陥っている。これを解決するためには、米国の豊富な先行研究を踏まえながら、日本人を対象とした調査研究を実施し、「大学への寄付意識に関する日本の特質性」を解明する視点からの研究が求められる。

2. 研究の目的

そこで本研究は、米国の寄付行動を説明する主要な理論を援用しながら、「日本人の大学に対する寄付意識は、如何なる個人の経験や属性の影響を受けているのか解明すること」を研究目的とする。

3. 研究の方法

以上の研究目的を明らかにするにあたっては、日本の大卒者に対する大規模な社会調査やサーベイ実験が必要となる。本研究では、まず、調査票設計のための理論と仮説を構築するために、米国の関連する先行研究のレビューとともに、日本の大学への寄付経験がある者 15 名に対するインタビュー調査を 2021 年に実施した。ここから、大学への寄付意識がどのような個人の経験や属性に規定されているのか、その日本の特質性を把握し、理論仮説を構築した上で調査票を設計した。この調査票を利用し、国勢調査の分布に性別・年代・地域を合わせ、20 代から 60 代の成人男女 5,053 名に対する調査票調査を 2022 年に実施した。また、2022 年、2023 年に、成人男女 (学生を除く) と最終学歴が大学または大学院卒の者を対象として、サーベイ実験を複数回実施をした。

4. 研究成果

(1) 大学と寄付を取り巻く日本の文脈に関する研究成果

高等教育と寄付 (Higher Education and Philanthropy) に関する研究が国際的な広がりを見せつつある中、日本の大学と寄付を取り巻く環境や文脈が十分に発信されておらず、国際的な共同研究の土壌ができていないという問題意識のもと、日本の高等教育財政や科学技術イノベーション政策の動向を概説した論文を 2 本執筆した。これらの研究成果は 2021 年に Handbook of Higher Education in Japan という海外学術図書に収録された。

Fukui, F. (2021a). The financing of higher education in Japan. In *Handbook of higher education in Japan* (pp. 109-121). Amsterdam University Press.

Fukui, F. (2021b). Research universities: Science, technology, and innovation policy. In *Handbook of higher education in Japan* (pp. 275-289). Amsterdam University Press.

(2) インタビュー調査から得られた大学への寄付意識に関する日本の特質

大学への寄付意識に関する日本の特質性を解明するにあたり、諸外国の寄付動機のモデルを援用するだけでなく、日本における寄付者の信念や思考プロセスを明らかにする必要があるという問題意識のもと、インタビュー調査に基づく現象学的研究を遂行した。ここから日本の大卒者で母校への寄付経験のある者 15 名への半構造化インタビューを通じて、日本人の大学への寄付動機として次の 6 つがあることを指摘した。6 つの動機とは、(1) 高等教育や科学研究の発展への期待、(2) 大学から受けた恩恵への感謝、(3) 寄付により大学から特定の恩恵を受けることへの期待、(4) 大学や同窓生との良好なつながりの維持、(5) 恩送り、(6) 他の寄付者からの刺激の 6 つである。ここから、フィランソロピー文化が弱い国においても、「支援された感覚 (sense of being supported)」が寄付行動に影響を及ぼす可能性があることを指摘した。本成果は、国際学術雑誌『Philanthropy & Education』の査読審査を経て掲載が確定し、現在印刷中である。

Fukui, F. (forthcoming). A Phenomenological Study of Japanese Donor's Motivations in the Higher Education Context. *Philanthropy & Education*, 7 (2).

(3) 「奨学金と寄付の循環構造」に関する理論と実証研究の結果

先のインタビュー調査から、過去に他者によって支えられた経験を持つ者が、大学を通じて次世代の教育に還元したいという動機が、大学への寄付行動の背景にあるということが理論仮説の一つとして示された。これを実証的に検証するために、日本人の大卒者に対するアンケート調査データを用いて分析を行った。ここでは特に、「給付型奨学金の受給経験」という変数に着目し、この経験が卒業後の寄付行動と関連性があるのか否かを検証した。分析の結果、給付型奨学金の受給経験者は、卒業後に大学に寄付をする傾向が奨学金受給経験のない者と比較して統計的に有意に高く、この傾向は国公立と私立大学の出身者の間でも同様の結果が得られた。一方で、貸与型奨学金の受給経験は、寄付行動と関連性が見られないという結果が得られた。また、給付型奨学金の受給経験者は、奨学金受給経験のない者と比べ、在学中の高等教育費用が寄付者によって支援されていたという意識を持っている傾向が強いことが確認された。これらの分析結果を踏まえ、過去に高等教育費用に関する支援を受けた人々が、次世代に向けた寄付をするという循環の構造（「奨学金と寄付の循環構造」）があることを指摘した。この結果は、給付型奨学金が高等教育受益者本人の費用負担を軽減する側面のみならず、将来的に寄付を通じた高等教育の社会的支出へと繋がる投資的な側面を持つ可能性を指摘するものである。本研究成果は、次の学術論文として発表した。

福井文威(2024)「高等教育における奨学金と寄付の循環構造：大学卒業者のミクロデータからの検証」『名古屋高等教育研究』24, p.205-221

(4) 大学への寄付経験や寄付意識に関する日本人の一般的傾向に関する分析の結果

日本人の大学への寄付経験や寄付意識を属性別（性別、年齢、学歴、所得など）に把握することを目的とし全国調査の回答データを分析した結果を、一般向けの書籍において発表した。大学への寄付経験者の動機を分析した結果、6 割近くの寄付経験者は過去に大学から受けた恩恵への御礼という側面があると回答し、5 割強の寄付経験者が科学研究の発展や高等教育の質向上に寄付したいとする回答を寄せた。また、大学への寄付行動の誘発条件としては、経済的な余裕と共に、寄付のインパクトに関する情報の提供が回答項目の上位に上がった。属性別に見ると、年齢、収入、学歴と大学への寄付行動には強い関連性がある傾向が確認された。この他、大学への寄付は潜在的な寄付者との関係構築の期間が長期間にわたっていることなども明らかになった。これらの分析結果は、以下の書籍に収録された。

福井文威(2023)「なぜ人々は大学に寄付をするのか」『日本の寄付を科学する：利他のアカデミア入門』（坂本治也編）明石書店。

本研究から派生して、日本人の大学に対する公共意識や高等教育財政の負担意識を把握するデータを集計し、その結果をまとめた以下の論考を寄稿した。

福井文威(2024)「大学の社会的役割と評価：国民意識調査から見えてくること」教育学術新聞アルカディア学報 771 号。

(5) サーベイ実験を用いた寄付行動の検証

日本においても国際卓越研究大学の構築にあたり、政府からの資金配分をマッチングファンドの手法を用いて、配分することが議論された。一方、マッチングファンドが寄付を誘発するのかが検討する上でのデータが不足していたことに鑑み、高等教育機関を卒業した日本人を対象にしたサーベイ実験を行い、マッチングファンドが日本人の高等教育機関への寄付意識や寄付金額に対してどのような影響を与えるのか予備的な検証を行った。分析の結果、マッチングフ

ファンドは日本においても、母校への寄付意向度合いを増加する効果が示され、寄付者の裾野を広げる効果があることが示唆された。一方で、マッチングの比率については、政府の負担割合を増やしたとしても、一人一人の寄付意向度合いや寄付金額の促進効果は十分に確認することはできないという結果が得られた。この成果は、日本高等教育学会第25回大会において「マッチングファンドは高等教育機関への寄付を促進するか」として口頭発表した。今後、より精緻な分析を加えた論文としてまとめる予定である。

以上の学術論文の成果をもとにし、学会や研究セミナーなどにおいて講演を行い、高等教育研究者のみならず、異分野の研究者や政策担当者等と、高等教育や科学研究を支える寄付に関する日本的文脈についての議論を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Fukui, Fumitake	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 A Phenomenological Study of Japanese Donors' Motivations in the Higher Education Context	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Philanthropy & Education	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2979/phe.00004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福井文威	4. 巻 24
2. 論文標題 高等教育における奨学金と寄付の循環構造：大学卒業者のマイクロデータからの検証	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 名古屋高等教育研究	6. 最初と最後の頁 205-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/njhe.24.205	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福井文威	4. 巻 -
2. 論文標題 大学の社会的役割と評価：国民意識調査から見えてくること	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アルカディア学報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福井文威	4. 巻 -
2. 論文標題 高等教育と科学研究を支える寄付	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Academic Research on Donations	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福井文威	4. 巻 22
2. 論文標題 第39回学術研究所講演会記録：「米国社会における寄付文化と高等教育、科学技術イノベーション」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鎌倉女子大学学術研究所報	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 高等教育と科学研究を支える寄附：日米の国際比較の視点から
3. 学会等名 名古屋大学高等教育研究センター第110回客員教授セミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 高等教育と科学研究を支える寄附：最近取り組んでいる研究の紹介
3. 学会等名 名古屋大学高等教育研究センタースタッフセミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 寄付税制を検討するにあたっての着眼点
3. 学会等名 日本私立大学協会 私立大学基本問題研究委員会予算・税制部会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 アメリカの大学の外部資金の獲得
3. 学会等名 東京大学大学院教育学研究科「大学経営政策各論」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 高等教育と寄付に関する米国の動向
3. 学会等名 国立大学協会受託研究会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 日本社会における大学と寄付意識
3. 学会等名 日本NPO学会セミナー：寄付・ファンドレイジング研究の最前線 - Emerging Scholarsの研究に学ぶ(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Fukui, Fumitake
2. 発表標題 What motivates Japanese donors to give to higher education? Preliminary results from an interview analysis
3. 学会等名 Highlighted Session: Investigating the Role of the Government, Foundations, and Higher Education Institutions in Philanthropy, The 66th Annual Conference CIES 2022(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 マッチングファンドは高等教育機関への寄付を促進するか：サーベイ実験からの検証
3. 学会等名 日本高等教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福井文威
2. 発表標題 米国社会における寄付文化と高等教育、科学技術イノベーション
3. 学会等名 第39回鎌倉女子大学学術研究所講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 福井文威	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 324
3. 書名 「なぜ人々は大学に寄付をするのか？」『日本の寄付を科学する：利他のアカデミア入門』（坂本治也編）	

1. 著者名 Fukui Fumitake	4. 発行年 2021年
2. 出版社 MHM Limited.	5. 総ページ数 446
3. 書名 The Financing of Higher Education in Japan. In P. Snowden (Ed.), Handbook of Higher Education in Japan.	

1. 著者名 Fukui Fumitake	4. 発行年 2021年
2. 出版社 MHM Limited.	5. 総ページ数 446
3. 書名 Research Universities: Science, Technology, and Innovation Policy. In P. Snowden (Ed.), Handbook of Higher Education in Japan.	

1. 著者名 福井文威	4. 発行年 2021年
2. 出版社 私学高等教育研究所	5. 総ページ数 -
3. 書名 「大学とフィランソロピー：可能性と課題」私学高等教育研究所（編）『私立大学研究の到達点』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------